

増林の縄文遺跡の検査

下前表面採集記

2000

増林の歴史を考える

其のⅡ

序

歴史に興味を持って人と接しているうちに、その会話の中から思い掛けなく歴史を知る上でのヒントを得ることがある。今回、表面採集に至った経緯もその人との会話から得たものである。ずっと以前に古利根川流域を草加・八潮市史編纂室が表面採集を行なった事柄が新聞に載っていたという話であった。

従前からの越谷の歴史の定説から考えるに、見田方遺跡以前の遺物は存在し得ないという。この疑問が解けずにいた私は、早速八潮郷土資料館を訪ね、一冊の報告書と新聞記事を入手、検討してみると縄文土器片が増林下前より数点見付かっているというのである。

存在し得ないものがある。何故という疑問を解くために私なりに表面採集を行なうことにした。

古利根川右岸、増林・増森26地点。新方川6地点。元荒川左岸、増林・増森8地点。合計40地点の表面採集を平成6年8月3日から同9年8月10日までの3年間行なった。

その中で今回特筆される地点は増林下前での採集品である。ここは草加・八潮遺跡確認調査団が昭和56年3月に調査し、縄文土器と平安時代及び中世の遺品を発見した地点である。私の表面採集の結果からも同様の遺物が見付かるなど、長い年月に渡っての人類の営みの物的証拠を得られた。人との会話から生じた不思議な現象である。

既にこの道の先人達の発見に対して表題に「検証」という大それた表現を用いた。それは、この事柄が未だに一般社会に受け入れられない観があるからで、今日、日本の古代史に毎日のように新事実が発見され、書き換えざるを得ない時代でもあるからである。

敢えて、表題とさせて頂く。

目次

第一章 採集に至る概要

- I 地名の考察
- II 採集の経緯

第二章 遺跡の立地

- I 景観
- II 環境の変化
- III 古代の標高を考える
- IV 潮位の変化

第三章 遺跡の概要

- I 寺院境内地
- II 表面に現れた土器

第四章 採集遺物

第五章 土器以外の遺物

- I 炭
- II 石

第六章 遺物のまとめ

第一章 採集に至る概要

I 地名の考察

平成6年8月、増林下前の地主山崎勝蔵氏から表面採集にあたっての了解を得ることができた。

山崎氏の屋号は「根郷」と呼ばれている。古くはこの一帯は根郷地域と通称言われ続けてきたのかも知れない。根郷という地名は各地にあるが、増林地区では現在の東越谷香取神社周辺を根郷地域と呼ぶように、増林下前の一部である山崎家周辺もそう言われ続けてきたのかも知れない。

根郷の「根」について漢和辞典で調べると、

①ね。草木の根元、地中にある部分。②もと、はじめ。ものごとの始め。③物の下部、つけね。④本来の性、「利根」。⑤ねざす、ねがく。ものごとがはじまる。⑥よりどころ、根拠。

等と記され、「郷」についてはギョウ、ゴウ。

①中国の周の時代の行政区門、12,500戸ある地。②ふるさと、「故郷」。③むらざと、むら。

となっており、増林の集落の始まりを指して言われてきたと考えられる。根郷に対して根通という地名が現存する。これは、根郷に通じる道から生まれてきたとも考えられる。

いずれにしても、古利根流域には古代から集落があったと考えられ、自然発生的に何時の日からかそういう呼び方が生まれ、今日に至ったと考えられる。

II 採集の経緯

序文に書き記した経緯を辿ってみると、採集開始は平成6年8月3日から同9年8月10日までである(中妻前表面採集を除く)。採集にあたっては詳細な日誌はつけていないが、概ね3年間の内、下前に150日以上通ったと思う。集められた破片は雑巾パケツにして3杯くらいで、そのうち6~7割が近世の焙烙片であった。

耕運機で耕した後に雨が降り、破片がよく見分けられる日は、毎日のように出かけ少しづつ集めたのである。ここまでなぜ集中できたかという、平成6年8月に採集を開始してすぐに古代のそれらしき土器片が見付かったからで、「もっと変わった土器が数多くあるのではないかしら」と夢に描き、私を駆り立てた結果が採集の日数に表れているのである。

元荒川左岸 増林西川~増林新田
新方川左右岸 増林定使野~増林三丁野
古利根川右岸 増林前波~増林本田

養鶏場跡地は表面をひっくり返しているため、なるべく避けたのである。

第二章 遺跡の立地

I 景観

当地、増林は越谷市の東部に位置し、周囲には川が流れている。新編武蔵風土記には民戸240戸、東西20町、南北13町、南は小林村、東は増森村、西は葛西用水堀を隔てて大吉村、北は古利根川を越えて葛飾郡上・下赤岩と記述されているが、中央には新方川（千間堀）が流れている。

増林地区の江戸時代寺社分布状況を調べてみると、元荒川沿いよりも古利根川沿いの方が群を抜いて多い。それだけ早くから集落ができ、豊かな地域であったことが想像できる。



増林NTTCVからの古利根景観

2840番地

1998年9月

II 環境の変化

私の生まれ育った家は川に近く、何時も川を眺めていた。初夏から秋にかけて、時々川が増水するたびにポンポン舟が何艘かを引き繋ぎ上流に向かって走っていった。又、上流の藻刈ごみ等が堰にたまり、堰払による増水でもポンポン舟が通過していった。今でも当時の光景が目に浮かぶ。

春から秋までの間、多くの人達がシジミ貝取りをしたり、古利根川でもやや深みのあるねんね岸で水浴びをした。子供の頃が思い出される。川は大雨の日以外は増水せず、今日のように潮の干満の影響は全く受けていなかった。

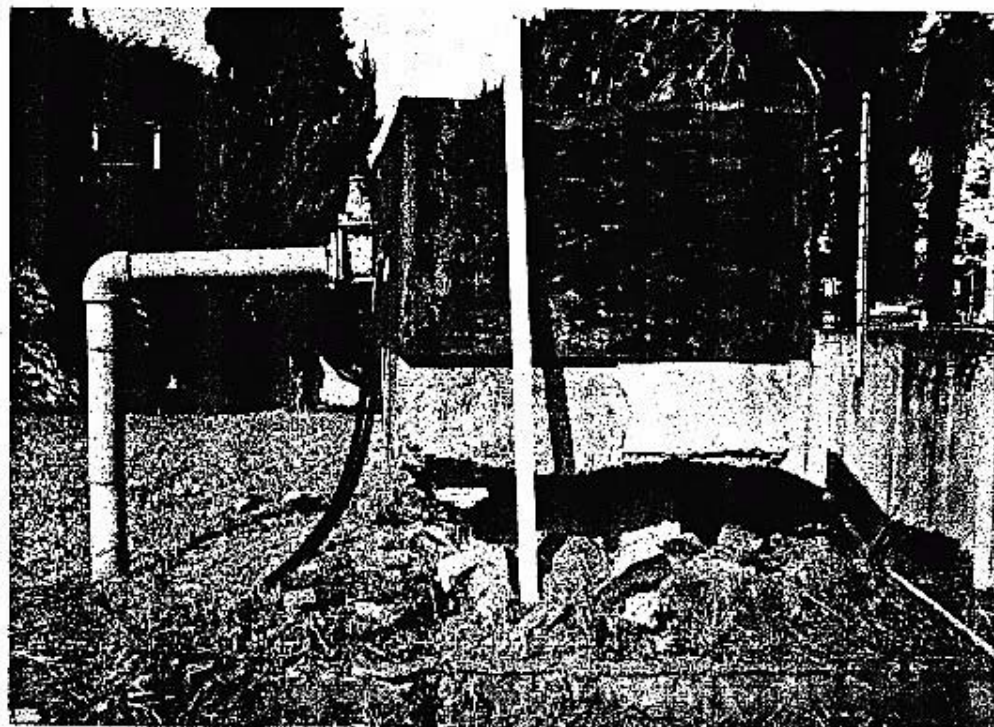
「潮止橋」、三郷市・八潮市の中川に架かる橋で松戸草加線の三郷と八潮市を結ぶ。この潮止という地名の由来は、東京湾の上潮の際、中川の水が逆流して上流までさかのぼり、この付近まで流れてきたことから付けられたという。現在、魚釣りの人達はなまずを釣る際、大潮の時間帯をみて出掛けるといふ。

Ⅲ 古代の標高を考える

平成5年度の越谷市都市計画図を見ると、古利根川下前の等高線は土手周辺にわずか5m程である。川土手から少し離れた地点に4mの等高線が見られる。採集地点は土手から4mよりやや下がった地点までである。地盤沈下観測点が増林に隣接した大吉に設置されたのは、昭和35年である。それから平成5年まで途中位置を変更したにしても、地盤沈下累計は約1,687mmとなっている。

下前の標高 $4\text{m} + 1,7\text{m} = 5,7\text{m}$

この数値以上が古代の標高に近づく。



第1水源の沈下の様子

増林3618番地

1996年10月29日

IV 潮位の変化

平成12年の芝浦の標準潮高をみると、大潮の年間最大値は、8月30日5時2分213cm、8月31日5時44分213cm。最小の大潮の日は2月27日23時11分の1,200cmとなっている。

増林での潮位がどの程度変化するのか、調べてみると別表の通りであった。これは、前波水位観測所（建設省関東地方建設局江戸川事務書所管）量水標で目算での水位を私が測定したものである。

零点高AP1,065m。APとは荒川水系ポイントを指す。APの0ポイントは隅田川河口に位置する霊岸島になっており、この地点はTP1,134mである。TPとは東京湾平均海面であり、日本の河川の基本0ポイントになっている。

つまり、AP1,065mというのは、

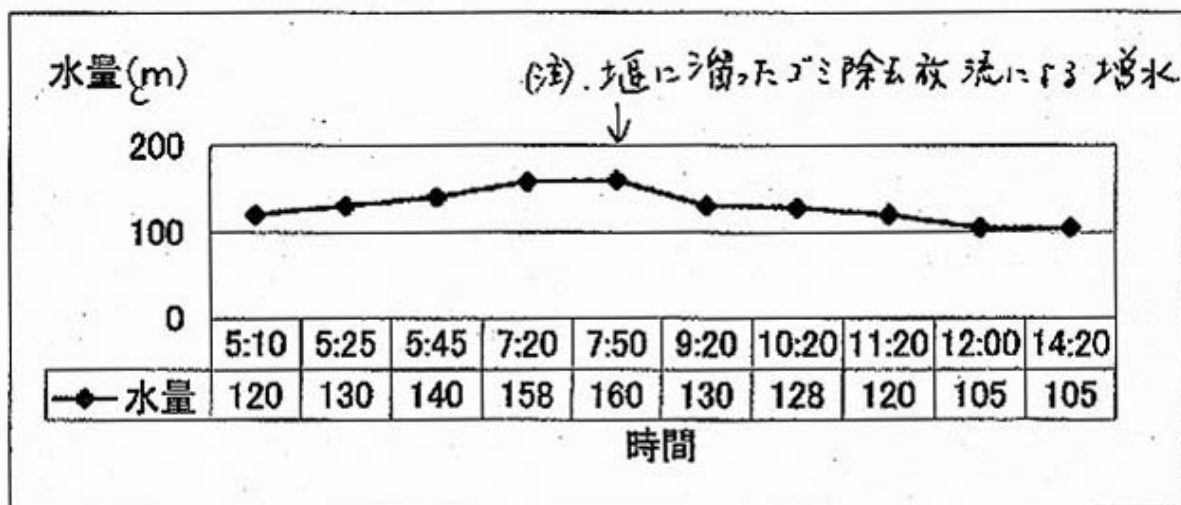
$$1,065 + 1,134 = 2,199\text{m}$$

東京湾海面より2,199m高位にあることを示している。

この潮の変化はたえず古利根川で見ることができる。古利根川は冬になると枯れ、湧水によるわずかな流れがあるか無いかの状態になり、点在する中州を渡って対岸の赤岩に行くことができた。今日では全く考えられない景観が蘇ってくる。

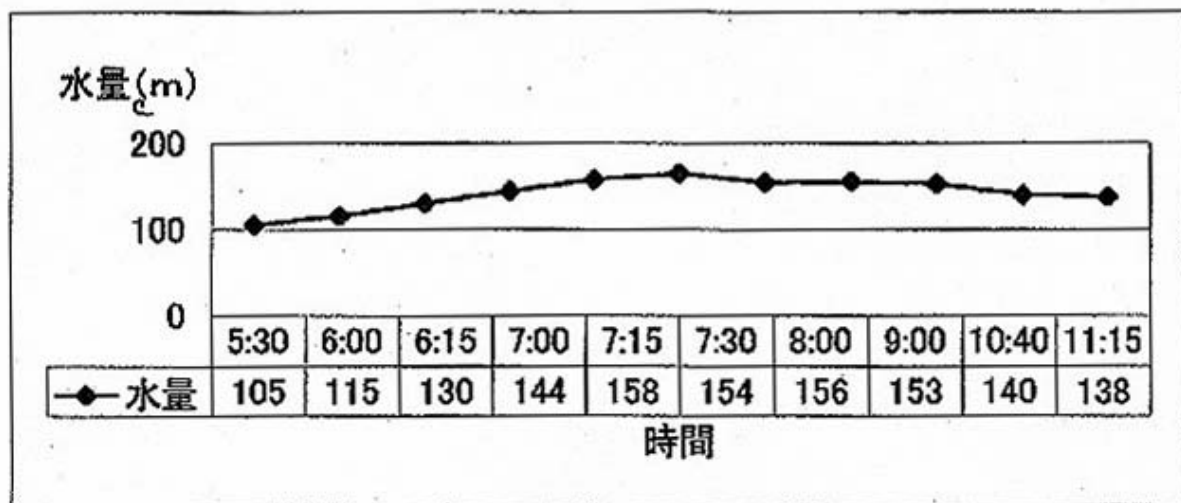
平成12年8月30日、東京芝浦の満潮は午前5時2分。

増林の最大満潮位は午前7時20分、53cm上昇



平成12年8月31日、東京芝浦の満潮は午前5時44分。

増林の最大満潮位は午前7時45分、53cm上昇



第三章 遺跡の概要

I 寺院境内地

増林下前には嘗て真言宗の寺院があった。これは、野田市の金乗院の末寺で広い境内地を有していた。今回、私が採集したのはその周辺である。尚、この寺院は明治41年8月15日、東正寺に合併。その後は廃寺となった。

II 表面に現れた土器

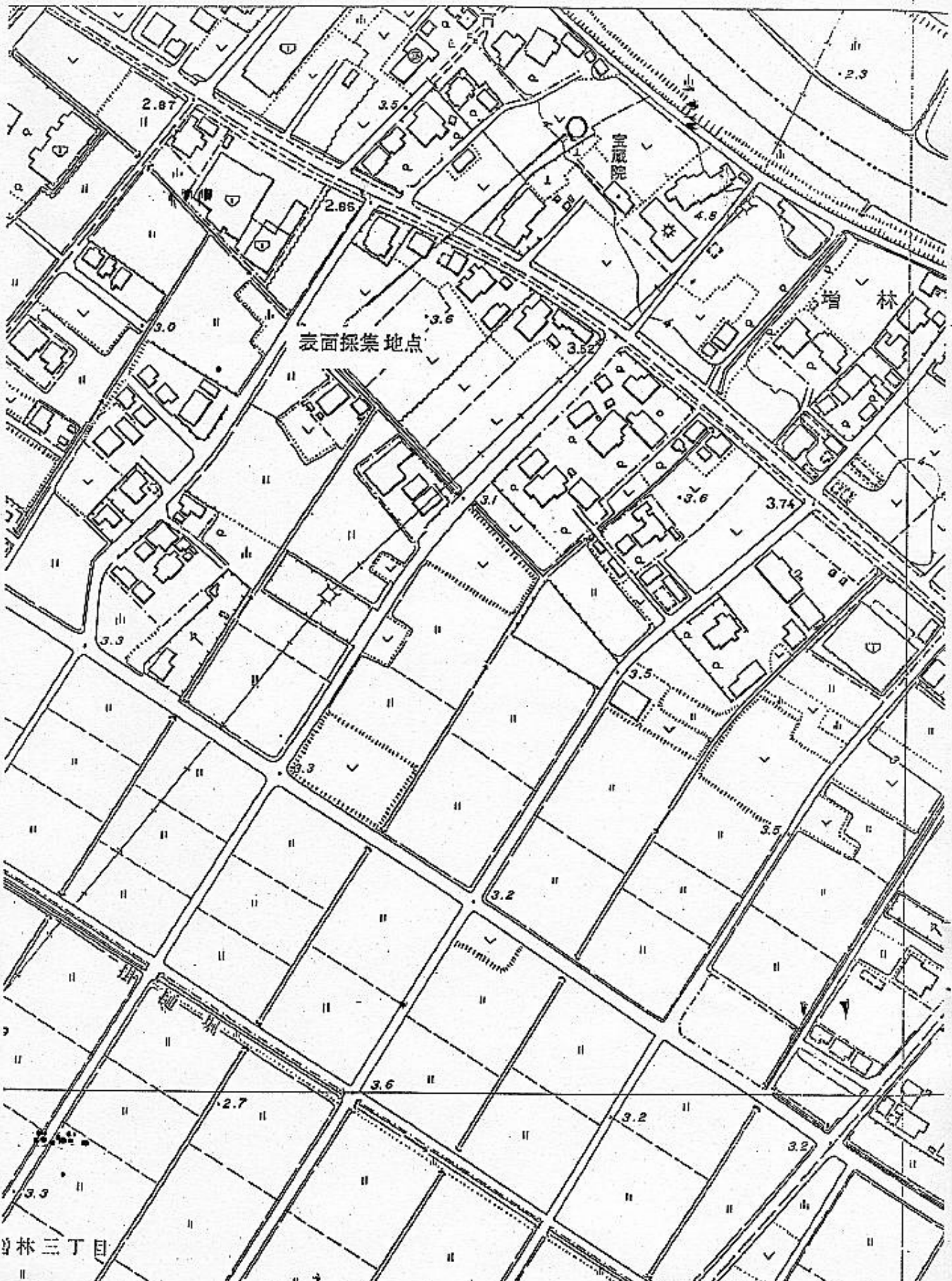
通常、発掘により発見できる遺物は深さ40～50cm掘り下げた地点から出る例が多い。なぜ今回、表面採集で発見に至ったかといえ、長い間、耕作を続けると20～25cm下に硬い層ができ、水捌けが悪くなる。作物の根が張りにくくなったり、作物の生育に影響するようになったので、昭和29～30年頃に三段返しを行なうようになった。地面を深く掘り下げ、なるべく下層の土を表面に、表面の土を下層のほうへ掘り返す作業である。この結果、深さ50～60cmの層の土が表面に出てくるのである。この時、瓦片がたくさん出たという話はあちこちから耳にしたものである。

おそらく、その中には古代の遺物が混ざり合っていたものと思われる。掘り返された瓦片などは古利根川の河川敷に捨てられ、やがて昭和37年ごろの河川改修工事で土と一緒に他の場所に持ち運ばれてしまい、今日に至っては確かな解明は不可能となってしまった。山崎氏の家もこの時期、三段返しを行っていたことだけは明白のことである。さらに、この山崎氏の土地は牛蒡や長芋など根の張る作物の作付けに適し、長い間よく作られてもいた。これらの作物は、地表から1m程潜るので、土を深く掘り下げないと掘り出せない。この結果、下層にあった土器の一部が表面に現われ、表面採集を可能にしてくれた訳である。

Ⅲ 共同墓地の整理

共同墓地使用者による墓地整理の気運が高まり、平成3年暮れより三郷市の山秀石材によって工事が始まった。山秀石材の菊地静夫氏によると、周囲の土地より高く盛土をせず、東より土を削り表面を平らにしたという。ブロック1枚が20cmで、約40cm掘り下げた。その際土器が掘り上げられ、地境に取り残されたものが私の表面採集によって拾い集められた物に含まれている。

通常、田畑での表面採集土器片は最大でも5cm以下で微細なものは5mm程しかない。ここでは最大20cmの物も採集した。墓地整理後2年も経て、ブロック塀の角で草の中に青苔が付着した状態でみつかった。整理前の墓地は東西に細長く、その中途に南北方向に三間巾で横切って畑として使用されていた。その地境から掘り上げられたと考えられる。



表面探集地点

三蔵院

林

林三丁目

2.87

3.5

2.9

2.85

3.0

3.6

3.52

3.1

3.6

3.74

3.3

3.5

3.5

3.2

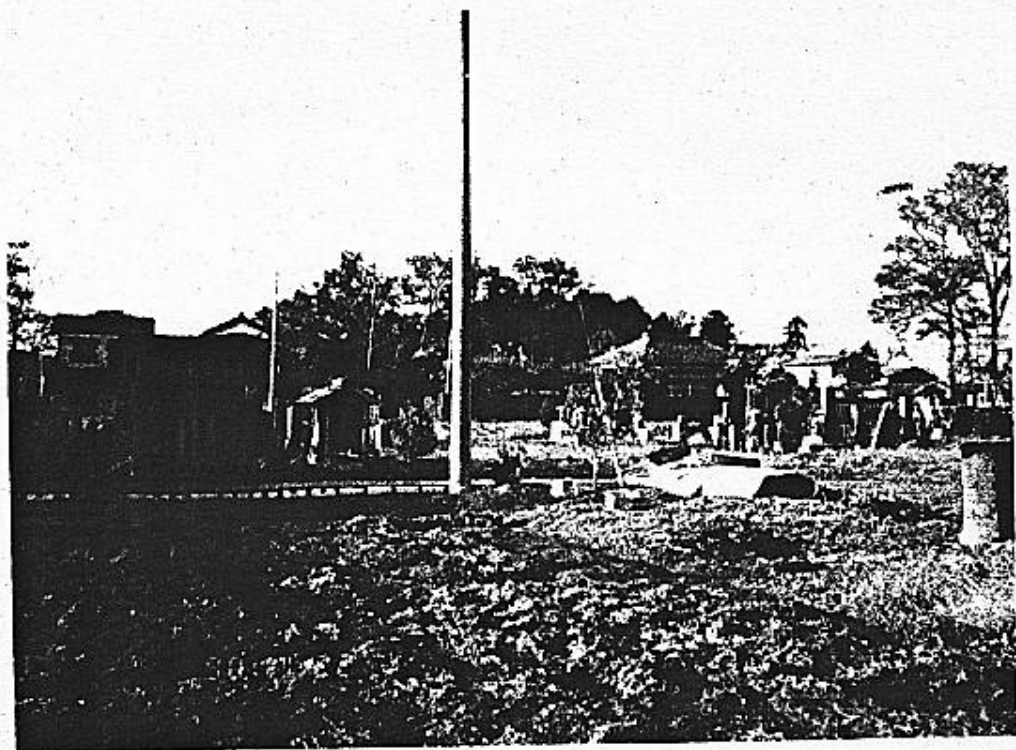
2.7

3.6

3.2

3.2

3.3



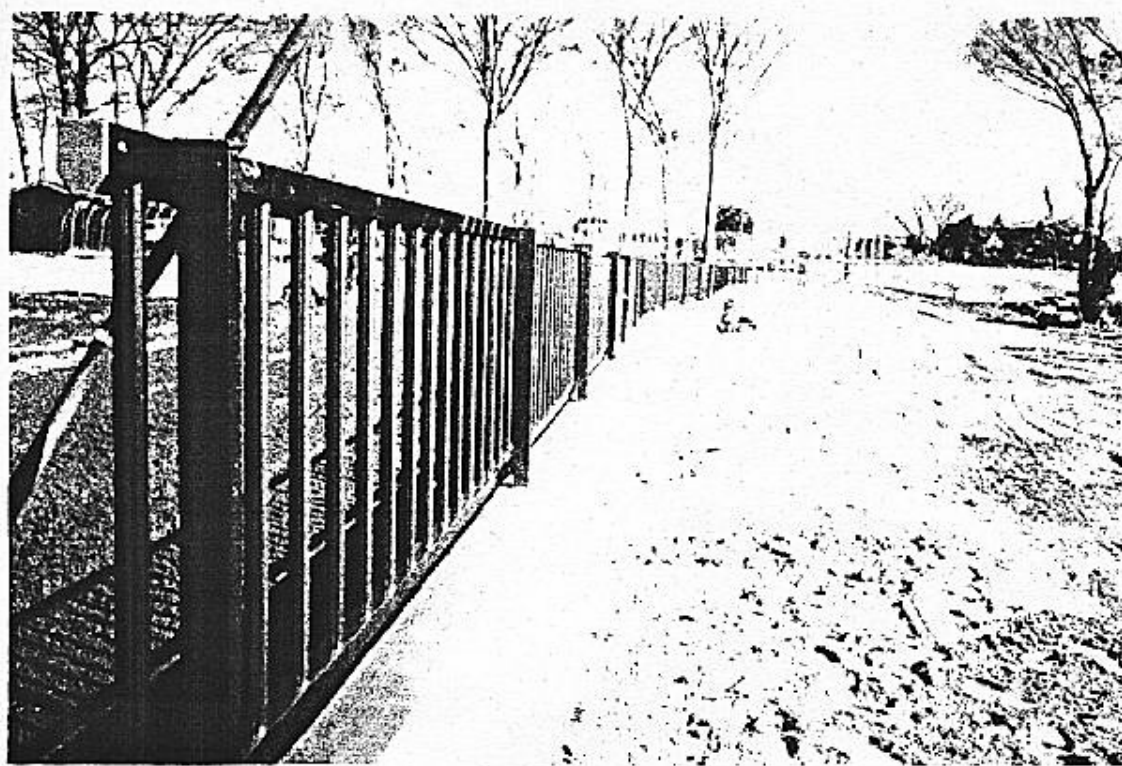
墓地整理前全景



墓地脇長芋栽培畝



基礎工事の掘りおこし



同所完成後



縄文中期 (深鉢)



縄文後期 (深鉢)



古墳初期 (つぼ)



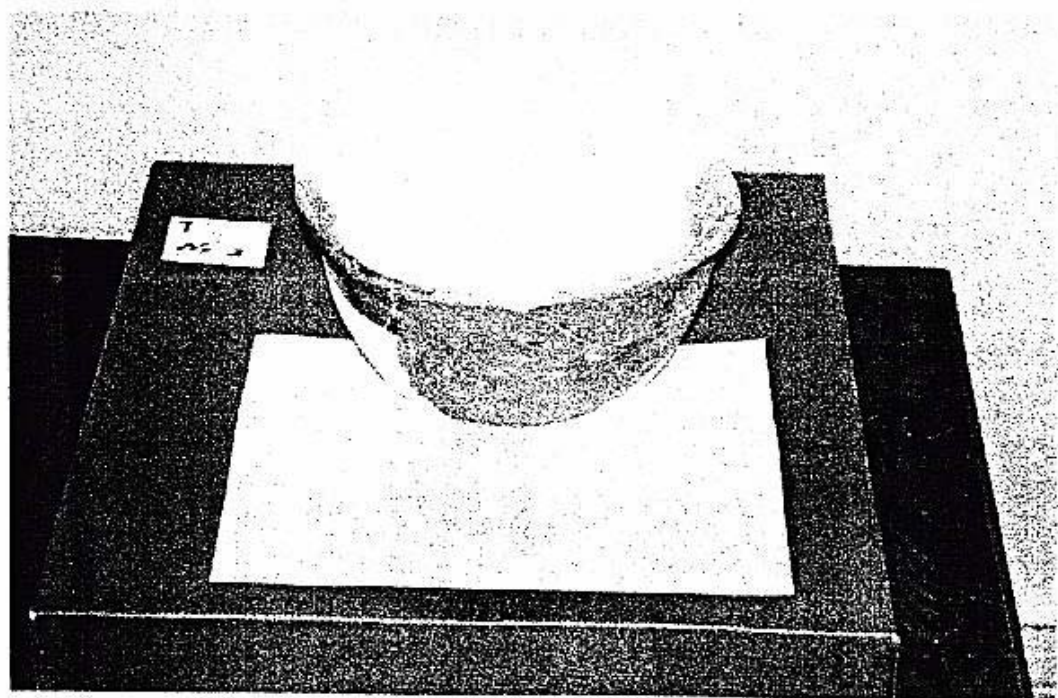
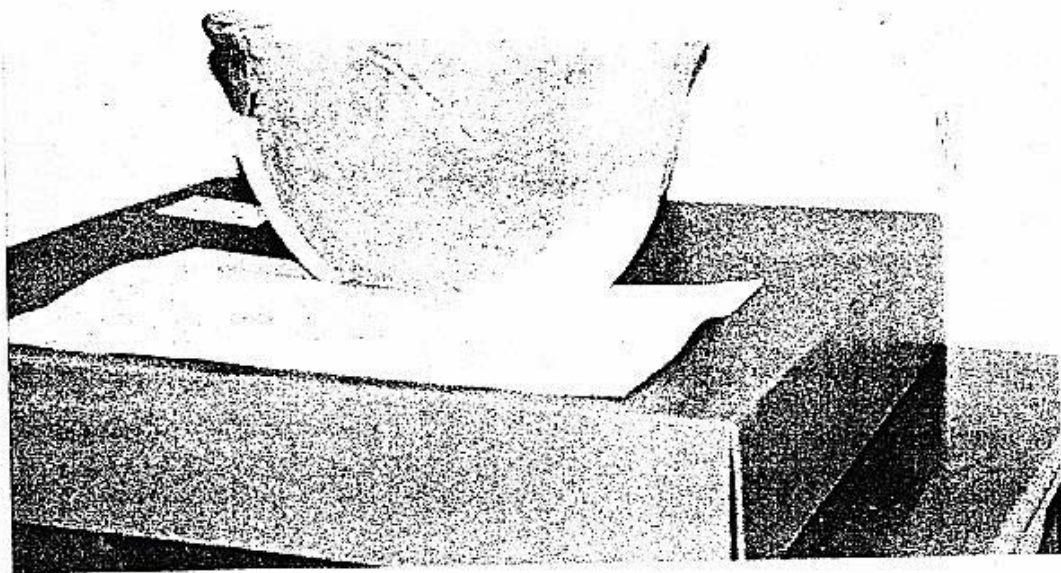
古墳後期



古墳後期 (蒸し器)



平安 (坪)
つぼ



古墳後期（蒸し器） 増林最古の復元土器



中世初期 (天目茶碗)



中世 (美濃焼)



中世 (唐津)



中世 (すりぼち)



中世 (片口)



中世 (皿)

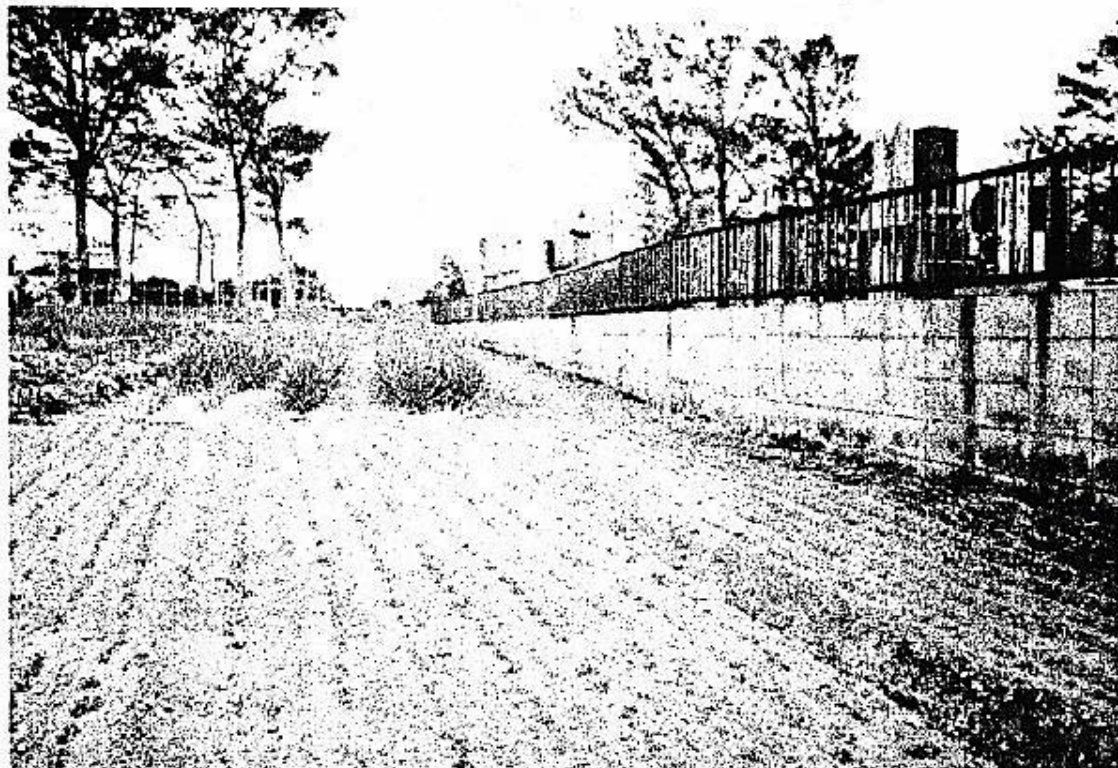
第五章 土器以外の遺物

I 炭

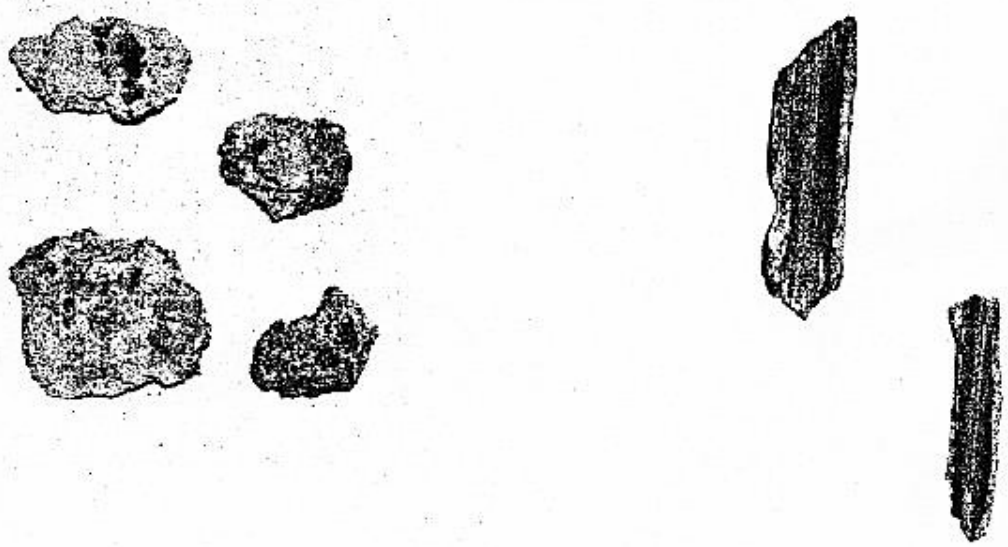
平成6年11月2日、下前4323-1で試し掘りを行ってみた。農閑期で畑には作付けがされていなかったもので、山崎勝蔵氏と共に鋤で1m四方、深さ60cm掘り起こしてみると40cm位の所から焼土が出始め、さらにその下から竹や木片の炭火炭が出てきた。

この試し掘りをした地点に近い場所から、古墳後期の蒸し器が見付かっている。ここは、古くは山林であった。明治15年7月6日、地券書換文書願いに山林と記されている。畑地として使用されるようになったのは昭和初期になってからで、それ以前は杉林であった。

試し掘り地点



炭火物



燃料について少し考えてみたいと思う。

榎本家文書に、安政5年12月棒真木四束。長さ尺八寸、縄が三尺六寸の丸木束が落ちていた、と役人に届けられた。そこで所有者を探すために180日間立て札を立てた。しかし落し主が現れなかったの
で期日後、安政6年5月19日に売却したとある。一両に付き60束
なので四束代銀四匁であった。いかに燃料が大事に取り扱われていた
か。

戦後に至っても、屋敷林のない家は燃料確保のためにリヤカーで野
田まで買い付けに行っていた。主に醤油樽を作る際に出る杉板の削り
かす、竹の削ぎ落とし、松の落ち葉のかき集め等までである。藁は縄・
ムシロなどに加工されるので燃料としては使えなかった。

プロパンガスへの移行は、イワタニ産業が昭和28年都内で販売開
始。当地では島根屋商店が昭和36年7月、石川商店が同38年12
月に化石燃料に徐々に変わっていった。

これらの変遷からしても、昭和初期に下前4323-1の杉林を切
り倒し開墾して畑にしたが、その際に切り倒された木々は林で燃やさ
れることなく、家に持ち帰り大事な燃料として利用されたことであろ
う。したがって、私の掘り起こした炭火炭は古代の物であったことに
相違ないのである。

II 石

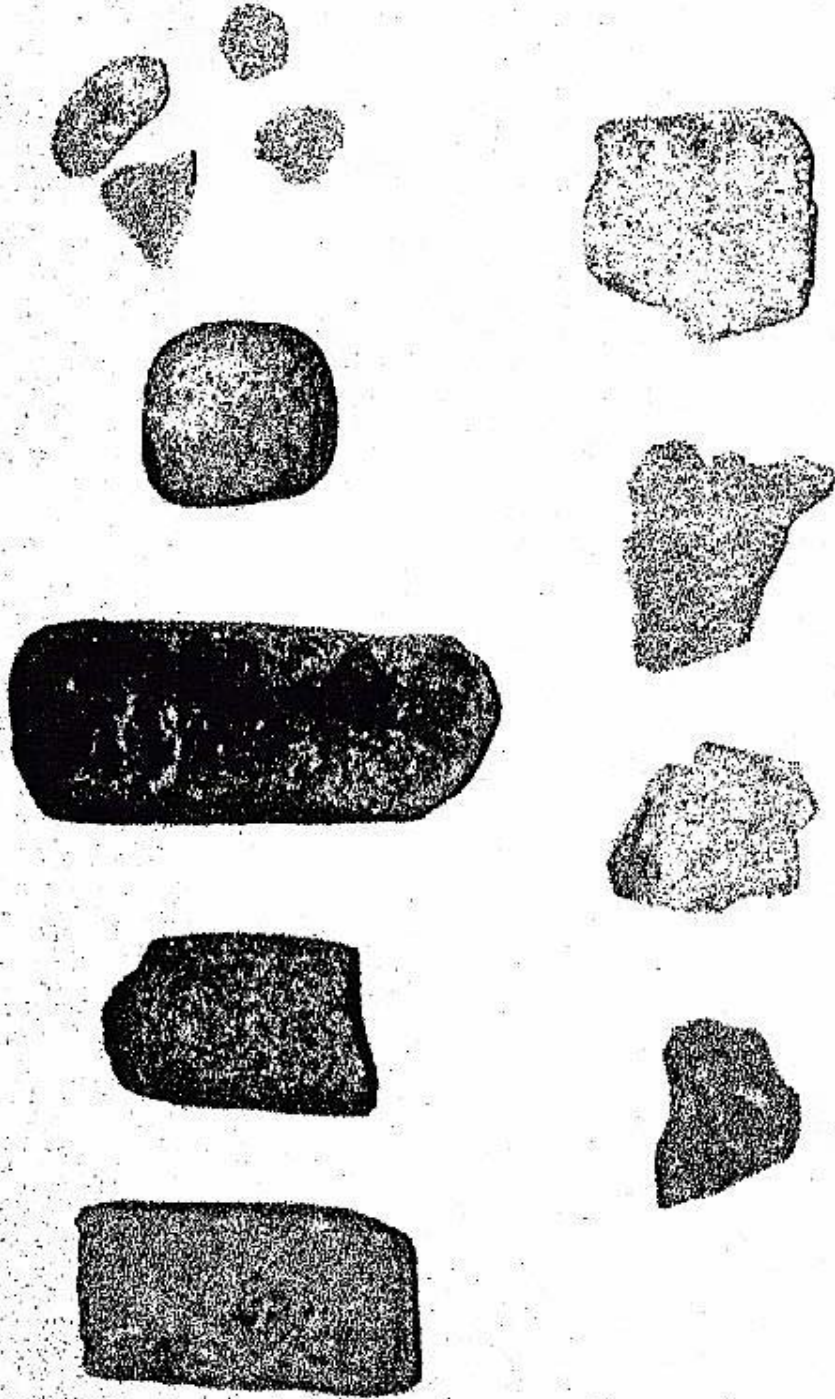
石は数点見付かっている。古代に使用したであろうと思われる物が含まれているが、表面採集なので確固たる判定はできない。

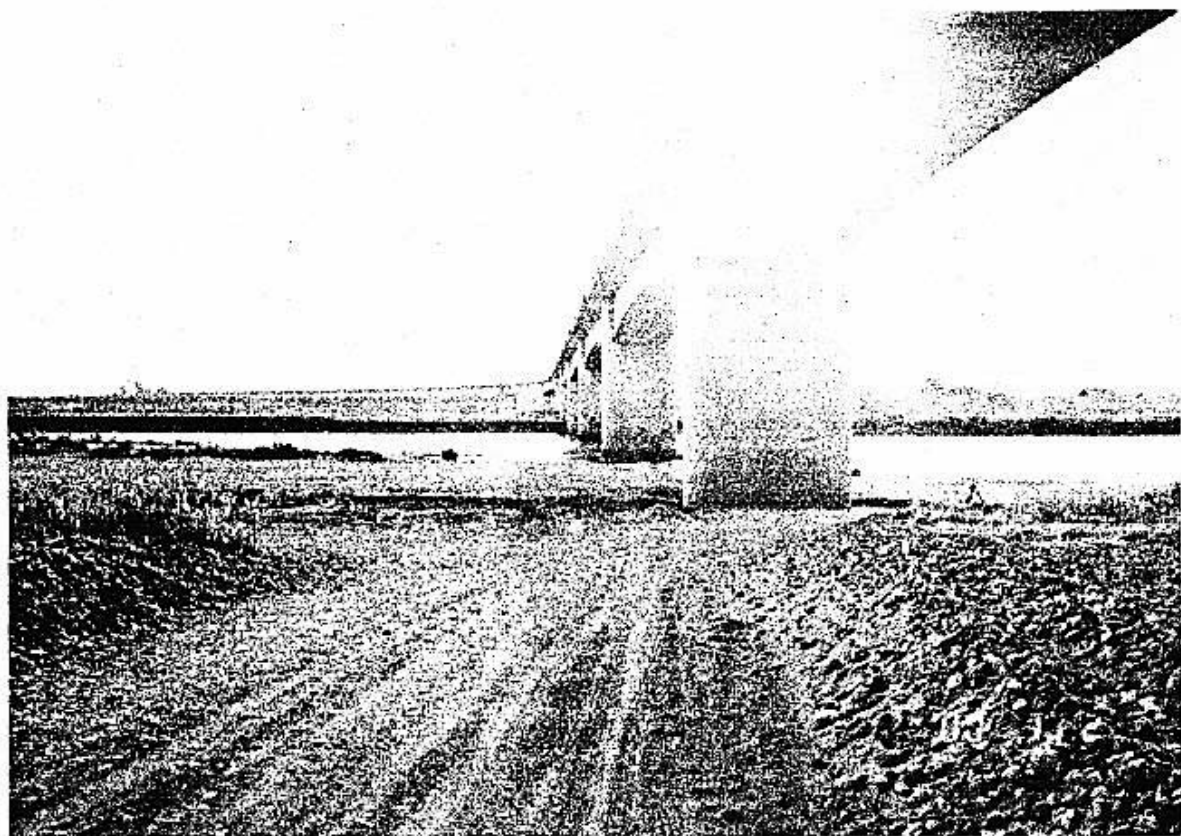
石の産出のない当地でも古くから板碑や墓石、家の土台石等があるが、いずれも舟運で何処からか当地まで運ばれてきたことであろう。周辺の地域を調べてみても、墓石は川に近いほど大型で、川から離れるほど小さくなっていく。

石は元々、山奥深い川元から下流へと流れに乗って流されていくわけで、大きなゴツゴツした石がだんだん角が取れ、丸みを帯びてさらには砂利となる。実際、古利根川の大元の利根川上流を上ってみると、群馬県の上武大橋付近ではすでに砂利となり、さらに10kmほど下流の妻沼あたりになるとその砂利さえもほとんどない。利根大堰近くでは全く見られなくなり、とうとうと水が流れるのみである。当地で石が見付かることは不思議であり、やはり古代人が石器として使用したと考えてもよいのではなかろうか。

追記するならば、砂利は戦中戦後の生活環境から見ると高価な物であった。戦後、荻島飛行場の滑走路を解体して道路に敷かれたものである。この飛行場は終戦間際に作られたため、資材不足から鉄筋の代わりに竹を使用していたので容易に解体できたのだという。砂利だけでなく、解体されたコンクリート片も牛や馬で運び道路に敷いたそうである。道路に石が敷かれるようになったのは、自動車が一般化してからである。

石





上武大橋左岸
2000年1月2日

第六章 遺物のまとめ

増林で発見された土器

地域 時代	① 増林下前	② 増林下前	③ 中妻前	④ 山中
縄文前期 6000～5000 前	○			
縄文中期 5000～4000 前	○	○		
縄文後期 4000～3000 前		○		
弥生前期 約 2000 年前				
弥生後期 3 世紀			○	
古墳前期 4 世紀		○	○	
古墳中期 5 世紀				
古墳後期 6 世紀		○		
飛鳥時代 7 世紀				○
平安時代 9 世紀以後	○	○		○
中世	○	○		○

- ① 草加・八潮両市の合同調査（昭和56年）
- ② 今回、私が発見した土器片
- ③ 前回、私が発見・発表した土器片
- ④ 未発表で次回発表予定

若干埋まらない時代もあるが、大筋で縄文時代から平成の今日に至る間、増林に人々が住んでいた形跡が見えてくるのである。

結

表題にこれほど遠大なテーマを掲げ、時には少々躊躇する面もあったが、これらは事実なので敢えて書き記し後世に残すことにした。増林の歴史が鎖の輪として少しずつ繋がり、大きな輪として展開される日を切望してやまない。

この小史を作るに当り、地主の山崎勝蔵氏、お忙しい中鑑定していただいた埼玉県埋蔵文化財調査事業団の資料部専門調査員・村田健二氏、同資料部部长・高橋一夫氏に心より感謝申し上げます。墓地整備に関する写真は、(有)山秀石材の菊地静夫氏より提供を受けました。重ねて御礼申し上げます。

増林は首都圏25kmにあり、徐々に都市化が進み貴重な歴史的文化遺産が失われる危険がある。この資料が増林の基礎資料として活用され、なお一層郷土に対する理解と親しみが深まることを願ってやまない。

平成12年10月

山本 泰秀

増林の縄文遺跡の検証

下前表面採集記

2000

増林の歴史を考える

其のⅡ

発行 平成12年10月

山本 泰秀

越谷市増林2-494